

第4回瑞浪市総合計画審議会 会議録

日時：令和4年10月28日（金）13:30～15:30

場所：保健センター3階大会議室

次 第

1. 会長あいさつ

2. 議 事

(1) 第3回瑞浪市総合計画審議会会議録について **資料1**

(2) 第7次瑞浪市総合計画の策定に係る各種ワークショップ報告書 **資料2**

①フューチャーセッション in みずなみ（学生ワークショップ）

②フューチャーセッション in みずなみ（学生ワークショップ中京学院大学編）

③みずなみ“未来”カフェ（自治会・まちづくり推進組織ワークショップ）

3. その他

瑞浪市制70周年記念事業ロゴマークの審査について **資料3**

出席者

出席委員

鈴木圭子 委員 大山理晴 委員 小島博和 委員 渡辺隆夫 委員 勝股清治 委員
安藤八重子 委員 井貝順子 委員 福永泰子 委員 中山千鶴 委員 林 一子 委員
萩尾英明 委員 稲垣昌克 委員 土屋誠治 委員 熊澤清和 委員 古田成志 委員
威知謙豪 委員 大宮康一 委員 森島嘉人 委員 東恵理子 委員 小木曾めぐみ委員
玉川幸枝 委員 [名簿順]

欠席委員

水野勝人 委員 山口富子 委員 小池 誠 委員 [名簿順]

【瑞浪市】

瑞浪市理事兼総務部長 正村 和英

【事務局】

加藤 昇（企画政策課長）

津田 良介（企画政策課企画政策係長）

三浦 啓輔（企画政策課企画政策係）

【第7次瑞浪市総合計画策定業務委託事業者】

本間 裕之（株式会社ジャパンインターナショナル総合研究所）

議 事

1. 会長あいさつ

【会 長】

今回は事務局より、第 6 次瑞浪市総合計画の進捗状況の報告や、第 7 次瑞浪市総合計画の策定に向けた各種アンケートに関する説明をいただいた。今回は、前回の会議録の確認と、学生や自治会・まちづくり推進組織が参加したワークショップに関する報告をいただく。ワークショップでは 10 年後の目指す都市像を思い描くことと、その都市像をどう実現するかについて議論されたということで、報告を大変楽しみにしている。わからないことなどあれば、何なりとご質問いただき、皆様に共有したいと考えている。活発な会になることを期待する。

2. 議 事

【事務局】

議事に入る前に資料の確認を行う。
以後の進行を大宮会長にお願いする。

【会 長】

本日の審議会の出席状況について、委員総数 24 名のうち 21 名の委員に出席いただき、瑞浪市総合計画審議会設置条例第 6 条第 2 項の、過半数以上という要件を満たしているため、会議は成立することをご報告する。

(1) 第 3 回瑞浪市総合計画審議会会議録について

【事務局】

資料 1 8 月 30 日開催、第 3 回瑞浪市総合計画審議会会議録の案である。ご確認をお願いする。委員の皆様のご承認後、市ホームページで公表する。前回と同様、発言された委員のお名前は記載せず、「委員」と表記する。

【会 長】

第 3 回審議会の会議録について、ご自身のご発言で相違等あればご指摘いただきたい。特にご意見等はないので、第 3 回瑞浪市総合計画審議会会議録についてはこれをもって確定とし、市民に向けて公表する。
続いて、(2)「第 7 次瑞浪市総合計画の策定に係る各種ワークショップ報告書」について、事務局より説明をお願いする。

(2) 第 7 次瑞浪市総合計画の策定に係る各種ワークショップ報告書

【事務局】

資料 2 第 7 次瑞浪市総合計画合計画の策定に向け、10 年後に目指すべき「都市像」や、

それを実現するために必要な取組について検討する機会として、また、この取組を今後のまちづくり人材の育成や協働に向けた関係構築も視野に入れ、「フューチャーセッション in みずなみ (学生ワークショップ)」、「みずなみ“未来”カフェ (自治会・まちづくり推進組織ワークショップ)」を開催した。

表紙裏面の目次にあるとおり、大きく 3 つのワークショップを行った。1 つ目の「フューチャーセッション in みずなみ (学生ワークショップ)」は、瑞浪高校、中京高校、麗澤瑞浪中学・高校、中京学院大学瑞浪キャンパスの学生の合同で開催。2 つ目の「フューチャーセッション in みずなみ (中京学院大学編)」は、中津川キャンパスの学生を主体として開催。3 つ目の「みずなみ“未来”カフェ」は、市内 8 地区で自治会やまちづくり組織主体で開催した。

1 ページ、「フューチャーセッション in みずなみ (学生ワークショップ)」は、6 月から 7 月にかけて計 4 回開催した。第 1 回では、市長よりこれまでのまちづくりやこれからのまちづくりで今後展開される主要事業を参加学生の皆さんに伝え、それについて学生の意見や思いを伺った。第 2 回では、学生が主体となり、瑞浪市の「強み」、「弱み」について考え、10 年後の瑞浪市の姿・将来像について検討した。第 3 回では、第 2 回で検討した将来像を実現するために必要な取組について、アイデアを出し合った。第 4 回では、これまでの意見交換を踏まえ、検討した将来像や実現に向けた取組を発表した。各学校 5～7 名程度の参加をいただいた。学生には、第 6 次瑞浪市総合計画をベースとした「健康福祉」、「生活環境」、「都市基盤」、「産業経済」、「教育文化」の 5 分野の中から興味のある分野を選択いただき、それぞれの分野に興味のある仲間同士でワークショップを行っていただいた。

2～4 ページが、各グループの発表の成果である。

健康福祉グループでは、「子どもから高齢者まで住みやすい地域福祉の提供を」を将来像に掲げた。具体的な取組として、学生と園児が触れ合う取組や、市独自の子育て支援金を創設するといったのではないかと、子育て支援策が充実していてもあまり知られていない部分もあるのもっとアピールすべきだ、バリアフリー・ユニバーサルデザインの導入や IT 機器についていけない高齢者の支援、高校生が高齢者の家に定期的に出向き交流することで高齢者が元気になるのではないかと等の意見があった。

生活環境グループでは、「今の良さを生かしたよりよい生活環境へ」を将来像に掲げた。今の市の良さとして学校が多いこと、子育てがしやすいこと、自然との共生、七夕祭りなどの伝統的文化があることを挙げ、4 つの提案をいただいた。

1 つ目は、若い人が遊べる施設や自由に意見交換できるオープンカフェスペースを作る。2 つ目は、開発により自然を減少させるのではなく、農地を活用し地産地消を進め、食の基盤をつくる。3 つ目は、交通面からコミュニティバスの土日運行を平日と同じぐらいに増やす。4 つ目は、化石関連のイベントなどを SNS や動画で発信・拡散し、多くの人に PR すべきであるという内容だった。

都市基盤グループでは「TWENTY」というキーワードを打ち立てた。「T」は地下 (Tika) で、名古屋のように駅地下にショッピングモール等を集めて夏場の避暑地にする。地下の冷気

を活用することで SDGs にも貢献できるのではとの提案。「W」は Work で、駅前に起業したい人に向けたオフィス周辺より安く貸し出すなど、起業資金をサポートして若者を呼び込むといいのではとの提案。「E」は Exciting で、人を集めるために映画館やアウトドア施設を。「N」は Nature で、自然を生かしキャンプ場を設け、化石体験イベント等の提案。「T」は、Topic で、話題性のある街にしようとの思いから、インターネットを活用して話題を発信する。「Y」は Young で、将来活躍できる若い人材を集めることが重要であるとの提案である。

産業経済グループでは、「みんなが気軽に立ち寄れる瑞浪市」を将来像に掲げた。観光スポットが少ないことや、若者向けの施設が少ないという短所を改善することが必要であるとの提案があった。また、自然を活用したバーベキュー場や地産地消の居酒屋などの施設が必要との提案もあった。

教育文化グループでは、「どの世代でも住みやすい瑞浪」を将来像に掲げた。実現に向けたポイントとして、1つ目に施設の面で、学習スペースを増やすことが必要、2つ目に文化として、子どもの遊べる場所、ショッピングモール、カラオケ、おしゃれなカフェやホットスポットがあるといいとの意見があった。これにより若者の滞在時間を増加させ、活気が生まれ、それによりさらに広い世代の人が集まる。子どもたちが過ごしやすくなることが大事であり、それにより安心して子育てができる。さらに、SNS を活用したイベントの情報発信や、グッズを作ったりすることでさらに市が活性化して新しい文化が生まれるのではないかと提案だった。

5、6 ページは第 1 回の感想・意見である。

7～16 ページは、実際のワークショップで学生たちが模造紙に「強み」、「弱み」などを付箋で貼ったものをデータ化した資料である。

17 ページからは、中京学院大学中津川キャンパスで行ったワークショップについてまとめている。中津川キャンパスで行われている、東濃 5 市のまちづくりについて学び考える講義を活用させていただき、全 3 回開催した。瑞浪市内だけではなく、近隣に住む若者から意見や提案をいただくとともに、学生にとっては、瑞浪市について学ぶ機会となったことと思う。2 グループに分かれ、第 1 回では、総合計画とは何か、瑞浪市とはどんなところかを学びながら、市外の若者から見た瑞浪市の「強み」、「弱み」を出し合った。第 2 回では、将来像の検討、実現に向けた取組提案を行い、第 3 回で発表会を開催した。

A グループでは、「若者が住んでみたくなるまち」を将来像に掲げ、「施設」、「自然」、「交通」の面から意見交換をした。「施設」では、映画館やボウリング場の誘致、お店の営業時間を長くすることで若者を集め、滞在時間を長くするという提案があった。「自然」と「施設」に関連して、グランピングやアスレチックなどで人を集めること、「交通」では、乗り捨てできるシェアサイクル、カーシェアがあれば便利、駅前ロータリーを広くすることで利便性が高まるのではないかと提案があった。

B グループでは、「生活するだけで自然と笑顔があふれるまち」を将来像に掲げ、瑞浪市の強みは「自然」、弱みは「遊ぶところが少ないこと」という視点から考えた。人が集まれ

る場所を作るべき、親子同士が会話や食事を通して交流を深めたり、子どもが自然と触れ合えることが大事。「自然と笑顔」というテーマを考えたときに、公園でのイベントやマルシェを交流の場とすることや、商業施設に休憩スペースを設ける。子育て教室の実施など、子どもと遊ぶ時間を増やすことも大事であるとの提案があった。また、バスがあまり通っていないことや、道の整備、安全面に課題があるので、それを解決することで「生活するだけで自然と笑顔があふれるまち」が実現できるのではないかと提案があった。

19ページからは「強み」、「弱み」の意見のまとめ、22、23ページは、ワークショップの中で模造紙に学生がまとめたものをデータ化した資料である。

24ページからは、「みずなみ“未来”カフェ（自治会・まちづくり推進組織ワークショップ）」の報告書である。市内8地区に分け、第1回では地域の強み・弱み、第2回では地域の将来像とその実現に向けた取組の検討を行い、第3回では、8地区が一堂に集まった合同発表会で、地域の将来像を共有した。“未来”カフェの開催にあたり、前段としてフューチャーセッション in みずなみのまとめを報告した。若者がどのようなことを思っているのかを共有した上で地域の将来像や取組を検討することで、10年、20年後を担う若い世代につながっていくといいのではないかと考え、こうした流れをとった。

25～32ページは、各地区の発表のまとめをワークショップの写真とともに記載している。内容については80ページ以降で説明する。

33～79ページは、第1回で洗い出した、強み・弱み、変わらない強み・変わらない弱みなどをまとめている。

80ページ以降は、第2回で検討した将来像と実現に向けた取組である。80ページ、瑞浪地区では、「そこそこ田舎、なかなか良い街」という将来像を掲げた。都会、田舎のどちらの面も併せ持つ中で、少子化対策が重要。受け入れる土壌がある。住みよしみずなみや自然を、子どもたちに残していきたいとの思いが込められている。それを実現するための取組として、万尺川沿いの環境を活用し地域内外の交流を深める、コミュニティ・スクールで活性化を図るなどが挙げられた。

81ページ、土岐地区では、「清流とき～美しい自然・文化・人の情～」という将来像を掲げた。土岐川を身近に感じながら、豊かな自然と歴史・文化に囲まれている地域であること。子どもからお年寄りまで笑顔であいさつし、助け合い、支え合う生活がこれからも続くようにとの思いが込められている。それを実現するための取組として、若者をはじめとする移住・定住者に集ってもらい、人情の厚さや土岐地区の良さを伝えられるよう、バズるような情報発信をすることなどが挙げられた。

82ページ、稲津地区では、「笑顔でつながる 住みたくなる町No.1!! ～自然・歴史・未来～」という将来像を掲げた。安心・安全な町であることが、みんなの笑顔・元気につながる。転入者が増えてきていることや、生活環境の向上も背景にしながら、より多くの人に住みたいと思ってもらえるようなまちを目指すとの思いが込められている。また、豊かな自然・歴史文化とともに、これからのAI等の先進的な取組がイメージできるよう「未来」を副題にしている。その実現に向けた取組として、大きな公園をつくりたい。人のつながりを

つくることで、身近な場所で子どもが遊べるような空間が実現できるようにするなどが挙げられた。

83 ページ、釜戸地区では、「釜戸が大好き 記憶（こころ）に残る 新しい田舎」という将来像を掲げた。子育て環境を豊かにしていくことで、釜戸で育った若者が、釜戸のことを大好きだと思ってもらえるようにという想いと、山、川、温泉、ほたる等豊かな自然があつつも、リニアの開通や道の駅、バイパスの開通、多世代が暮らしやすいことなど、田舎と都会のハイブリッドであることから、このような将来像を掲げた。その実現に向けた取組として、新しいまちを情報発信する、化石・自然・歴史・文化を生かした地域の学習の場と人づくりなどが挙げられた。

84 ページ、大湫地区では、「水・光・風 大湫 ～ともに生きるまち～」という将来像を掲げた。「大湫」自体が歴史・文化の薫るまち。住み続けたい大湫町を実現するためには、豊かな自然の中で、地域の人々が人・自然・歴史・文化と共生していくことが欠かせない。植物にとって水・光・風は欠かせない。この要素は自然だけでなく、まちの人の輝き（光）、行き交う人々の風という意味も含まれている。その実現に向けた取組として、新しい暮らし、セカンドホーム、農的くらしのマッチング、大湫アーカイブ、豊かな田園風景の保全と継承、自然と文化の継承などが挙げられた。

85 ページ、日吉地区では、「人（子どもから老人まで）がイキイキ、自然豊かな歴史・文化・人情あふれる郷（さと） 日吉 ～歩くとわかる 日吉たんぼう!!～（子どもドキドキ、自然ワクワク、歴史モリモリ、人情がホクホク）」という将来を像掲げた。子どもから老人まで、みんながイキイキと生活していることが大事。高齢者が生きがい・やりがいを感じつつ、健康寿命日本一を目指す。豊かな自然、歴史、文化に恵まれており、人情があふれる郷であることが日吉の誇りである。日吉地区を歩いてもらうことで、色々な魅力を発見できる。田んぼばかりではない、そして「探訪」も掛け合わせている。子どもがドキドキできる、自然にワクワクできる、歴史がモリモリ盛りだくさん、人情がホクホク温かいことも含めて目指していくとし、この将来像を掲げた。その実現に向けた取組として、人口増加策として農地を宅地化するとともに空き家バンクによる空き家活用を進めることで子育て世帯の流入を促す。歴史文化を生かした観光策・資源の整備、休憩場、スタンプラリーなどの取組が挙げられた。

86 ページ、明世地区では、「明るく輝く 自然・歴史・ふれあいの輪 みんな元気な活力あるまち あきよ」という将来像を掲げた。ホテルや化石など、自然が豊か。人のつながりがあたたかい。その中でみんなが元気でいるまちを目指す。加えて経済に活力があることが大事なので「活力」という言葉を用いた。「あきよ」を平仮名にすることで、地区の広がりを表現した。その実現に向けた取組として、地域の美化活動、歴史文化の伝承、子どもと高齢者の見守り活動、ホテル育成事業へ子どもにも参加してもらうなどが挙げられた。

87 ページ、陶地区では、「子どもからお年寄りまで安心して楽しく、明るく賑やか活気のあるまち ～第二の人生も楽しめるまち こま犬の里 陶～」という将来像を掲げた。子どもが育てやすいまちという方向性と、高齢者が元気でいきいきと、誰もが安心して楽しく暮

らせるまち。そして、人がたくさん集まり、明るくにぎやかなまちづくりを進めるという方向。第二の人生を楽しめるような、おじさんたちの夢がかなえられるようなまちづくりを思い、この将来像となった。それを実現するための取組として、子育てしやすいまちのため、昼間、お年寄りが子どもを見守る取組、ライトアップをする、こま犬の灯籠、陶器で灯籠をつくる。それを一家に一つ置き、地域を明るくする取組などが挙げられた。

これらのワークショップを通して、幅広い世代の方々からのご意見、ご提案を把握するとともに、10年後、20年後の未来について、将来像やその実現に向けた取組を考えることができた。これらのワークショップの成果は、さらに内容を整理し、若者や地域の意見・提案として第7次瑞浪市総合計画にできる限り反映していきたい。また、地域の取組については、これを始まりとして、さらに各地域において検討を重ねていただき、地域計画として策定をしていただくことで、地域のビジョンがより具体化され、進むべき方向性が明確になると考える。市としても地域計画の策定に向けた支援を行う方針である。それぞれの地域がそれぞれの活動で課題解消につなげていただくことがまちづくり活動の意義と考えている。

【会 長】

このワークショップの実施方法について、どの方がファシリテーターをして、こういった形で進めたのか。

【事務局】

ワークショップの最初に市が伝えたいことを話してから進めた。ファシリテーターはジャパンインターナショナル総合研究所の方にしてもらった。

【会 長】

第三者の中立的な立場の方が会を進められたということで、公平性が保たれたことを確認した。

【委 員】

ワークショップやグループディスカッションで挙げたことを、今後の行政の課題として取り上げるということか。

自然という文言が多く挙げられているが、自然の定義がわからない。今の荒れ放題の状態も1つの自然と考えるのか。特に瑞浪市は森林が多く、開発ができない。また、スギの人工造林のせいで、花粉症などの健康被害が出ている。そういうものも含めて自然なのか。他の地域では人工造林を雑木林に変えるなどの取組をしている。

【会 長】

ワークショップは住民の率直な意見であるため、言葉の定義や捉え方はまちまちかと思う。今後は、例えば「自然」という言葉を地区の方や学生の方がどう捉えているかなど、事

務局で解釈して、取組に反映していただけることと思う。

【事務局】

第 6 次瑞浪市総合計画の策定時、学生を主体としたワークショップは行わなかった。今回は 10 年、20 年先を担う若者の意見を聞きたいということで、このワークショップやアンケートを行った。若者からはユニークな提案やそのとおりだと思ふご意見をいただいた。総合計画は幅広い計画なので、一つ一つ丁寧に読み取り、どのような施策を取り組むか、来年にかけて精査していきたいと考えている。まずは、基本構想に落とし込むことを考えている。

自然については、どのワークショップでも瑞浪市の特徴として、豊かな自然、緑というイメージが強いというご意見だったが、会長が言われたとおり、それぞれの思いがあると思う。手入れしたものも自然であるし、荒れ放題の状態も自然である。市としては森林環境税などを使いながら里山の保全をするとともに、乱開発を防止する取組も実施する必要があると考える。一方、必要な開発もあるため、自然が壊されないことに配慮しつつ、SDGs に貢献できる総合計画としていきたい。自然は広義な意味があるので、いろいろな意味を踏まえながら、基本構想、基本計画に落とし込んでいきたいと考えている。

【会 長】

自然を肯定的に見るか、否定的に見るか。手付かずの自然がいい、一方で人の手を入れることがリスク管理になり得るなど、多様な面がある。その辺は、計画に落とし込む際に明確にできればと思っている。

【委 員】

通学路、日常の道路などのインフラ整備があまりできてない。特に通学路などはしっかり整備しないと、子どもたちが安心して生活できないので、そこが第一だと思う。

高齢者と子どもたちの交流については、現状では高齢者と子どもの交流の場やコミュニティ組織ができてないので、第 7 次瑞浪市総合計画ではそうした場を持てるような施設の整備なども必要だと強く思う。また、高齢者がそのような場に行くための足の問題もある。少し遠いと歩いて行けないし、コミュニティバスも時間が合わなかったりするので、そうしたことも十分加味して第 7 次瑞浪市総合計画に取り組んでいただきたい。

【事務局】

子どもは宝物なので、インフラをしっかりと整備し、安全対策は今まで以上に徹底しなければならぬ。各地区から毎年要望をいただいております、市長と語る会等でもご意見をいただいておりますので、教育委員会と協力しながら、安全対策をこれまで同様に進める。

高齢者と子どもの交流について、今、コミュニティ・スクールという、小・中学校の運営に地域の方が入り、その地域の小学校区の子どもたちを地域のみんで育てるという取組が動きだしている。学校の先生、まちづくりの方、区長、PTA、民生委員など、幅広い分野

の代表の方や役員の方が一堂に集まり、地域の子どもをどのようにみんなで育てていくかを考えている。令和6年度までに市内全小・中学校で整備する予定である。そういった中で、委員が言われたような取組を一步一步進めていければと考えている。

【委員】

資料の5ページに、「瑞浪市に貢献できることを少しずつ探して頑張っていきたい」、「まちづくりに自分たちも参加できたらと思う」など、まちづくりの組織の人間として涙が出る言葉がある。今回、若者の意見を聞くために学生ワークショップを取り入れたこと、そして、若者にこのような意識があることを、今後の市政やまちづくりの中でどのように活かしていくか。例えば、現在は域学連携という市内の高校と地域の企業の連携や、青少年育成の市民会議において、10月の始めに高校生と語る会が開催されている。こういった若者・学生とこれからの瑞浪の将来像をつなげるような意見の場を一本化できれば、第7次瑞浪市総合計画の中で若者の意見がいろいろな立場から集約できるのではないかと思う。

【事務局】

そのとおりだと思う。ほかのまちづくりの役員の方からも、まちづくりの役員の会議は一定の年齢以上の方の集まりなので、10代、20代の若者と対面で話ができる場があるという意見や、まちづくりワークショップの中に学生ワークショップのメンバーが入っていればなお良かったという意見を多数いただいております、何か一緒にできる方法がないか、探しているところである。例えば、学生の夏休み、冬休みなどの時間を使う、学校に協力していただいて日中に開催するといった取組を第7次瑞浪市総合計画の中に落とし込めればと考えている。

【会長】

世代を超えた交流の場、横断的な世代の方々が交流できる場づくりは、大変すばらしい取組である。私の大学でも、地域の方々とワークショップを行っているが、いろいろな方々が集まることで様々なアイデアが出るし、共通認識も持てる。子ども、まちづくりの方々に加えて、中間の世代も交えて話をする場をつくるのが課題だと考える。

【委員】

一昨年、大湫町で総合振興計画を作成した。この発表資料は1枚にまとまっており、簡潔でわかりやすいが、ここだけでは語り切れていないところもある。一言で書かれている部分も、実は、各まちづくりの皆さんは熱意を持っていろいろな活動されている。その上で瑞浪市というものの概念が形成されていると思うので、まとめていく際には各地域の取組をもう少し深掘りしていただき、大湫町の総合振興計画や、各地域で取りまとめたものも参考にしていきたい。

【事務局】

大湫地区は非常に団結力のある地区で、一番初めにまちづくり組織ができた。瑞浪市の取組の中には大湫町を参考にしたものもある。今回、8地区から将来都市像が出たので、これをたたき台として、大湫町の振興計画のようなものをほかの7地区でも作りたいと考えている。それには地区の力もちろん必要であるし、行政も後方支援をしながら、第7次瑞浪市総合計画ができる前に、まずは地域の計画を立て、どのような取組を実施するかということを示し、それを第7次瑞浪市総合計画に反映していきたいと考えている。

【会 長】

地区を越えた交流、取組の共有の場も今後一層重要になってくると思った。

【委 員】

先日、名古屋大学の先生の話聞き、大湫地区の振興計画を読んだ。大湫は将来をきちんと見据えており、若い人たちの意見も入れて、こうなりたいと考えていることが本当によく分かり感動したので、できればそれをここの全員に配っていただきたい。まず、自分の所のことをよく知らなければいけないので、そういうものを作るのは必要なことだと思った。

稲津地区などは2、3年後には田んぼがなくなるのではないかと感じている。大湫だけが「豊かな田園風景を保ちたい」ということが出ていたが、ほかの地区では全く出ていない。この時代、ウクライナ危機における食糧への影響もあると思うので、子どもたちのために水田は残さなければいけないと思う。第7次瑞浪市総合計画では水田の保全を大きく取り上げていただきたい。

【事務局】

担う方の減少をどうしていくかという話は非常に大事なことであり、総合計画の中に位置付ける必要があると考えている。

休耕田の扱いについて、例えば就労支援で自治体がお金を出して若い方を雇用して維持していくとか、AIなどの最新技術を使って人が行っていたことを機械に置き換えるという取組も進んでいる。瑞浪市の実情に合った取組がこれからの課題になってくる。農政部局である農林課としっかりと検討していきたい。

【委 員】

高齢者と若い世代の交流を計画へ落とし込むことを検討していると言われたが、昔は明世地区でも普通に、しめ縄づくりを学校で行ったり、戸狩の古墳を見に行ったり、化石山という劇を6年生が毎年して継承していくといった中で交流があった。それが今は全くなくなっている。今回も、改めて始まったとしてもまたなくなることになると悲しいので、未永く続くようにしてもらいたい。

ワークショップの意見について、若い方に意見を求めると、ワークショップ以外のところ

でも大体同じような意見が出る。例えば、大きいショッピングモールが欲しいとか、お店がもっとたくさん欲しいという意見である。学生たちが自由に出した意見は、純粋なとてもいい意見だとは思いますが、「いいね」「すごいね」だけではなく、現状を踏まえた上でどうかと意見を求めたり、ある程度議題に乗せて建設的な意見交換をする場もあると、より現実的な中身の濃いものになると思うので、そういう取組も検討いただきたい。

【事務局】

若者と高齢者の交流について、過去にあったものが今はなくなってしまった理由はわからないが、例えば担い手不足で継承がうまくいかなかったことが考えられる。第 6 次瑞浪市総合計画から「協働」を掲げている。地域のまちづくりで交流の場を継承していくことや、それに対して市も積極的に支援していくことが非常に重要であるため、若者と高齢者の交流という点を、引き続き第 7 次瑞浪市総合計画でも検討していきたい。

2 点目の若者の意見について、若者に知識があればもっといろいろ考えられるということもあろうかと思う。今回のワークショップは、最初に市長から、市の現在実施している事業や、これまでのまちづくり、これからのまちづくりについて説明を行ったあとに、ワークショップをスタートした。私も今回の若者のワークショップに立ち会ったが、皆さん、とても積極的に取り組んでいただいたという印象がある。若者の意見という、目の前のことがよく出るものだが、今回は皆さんが興味のある分野に分かれて、自分のスマホやタブレットでその分野について積極的に調べて、勉強しながら前向きに発言いただいた。シティプロモーションや情報発信が足りないという、一歩進んだ意見も今回はよく見受けられた。今後、若い方にも高齢者の方にも、市がどういうことをしているかを丁寧に伝えていくことが重要と思っている。そういったことを心掛けながら進めていきたいと考えている。

【会 長】

ご指摘のように、若者の意見は大体同じになる。テレビやインターネットなどで同じようなものしか見聞きしておらず、地元の良さや魅力を十分に知っていない、教わっていないという現状があるのではないかと思う。例えば、「イオンをつくろう」ではなく、「イオンがなくてもいいよね」という意見が出るように、違う視点で地元の魅力を伝えていくという課題が、このワークショップから見えてきたのではないかと思う。若者の意見を酌むというよりは、なぜそのような発言をしたかというところを掘り進めることも重要かと思う。

【委 員】

稲津地区に大きな公園を造りたいと 30 年以上思っている。土岐市には桜が咲くいい公園があちこちにあるが、稲津地区には公園がなく、子どもを遊ばせる所がとても少ない。今は休耕田が多いので、そういう所を活用して大きな公園を 1 つでも造っていただけないか。夏に水遊びをしに化石公園に行ったが、泥だらけで汚かった。瑞浪市で唯一水遊びができる公園がこれでは、市外から遊びに来る人もいないだろうと残念に思った。大湫地区は琵琶峠な

ど、数年前に JR のツアーにも組み込まれたくらいすごい所がたくさんある。釜戸地区は滝などがある。稲津地区は何もないので、ぜひ大きな公園を造っていただき、稲津地区に人が遊びに来るようにしていただきたい。

【事務局】

何年にもわたって、様々な場面で公園の要望を伺っているのですが、市としてどのように進めていくか考えていきたい。貴重なご意見として賜る。

【会 長】

アピールし続けることも大切だと思う。行政に対するご意見もいろいろあるが、大湫地区では、地域の方々がみんな手で携えて一緒にやろうという気持ちが強いため、先駆的な取組ができたのだと思う。地区によって人口の差はあるが、地域の方々の気持ちをどう変えいくか、地域住民の方々がどう自分事として取り組んでいくかが今後のポイントである。公園の話も、一部の方は欲しいと思っけていても、もしかするとほかの方は、公園は要らないと思っけている可能性もある。公園が必要ということが市民の声として大きくなれば、市役所や市長も動くと思うので、様々な方々の気持ちや声を届けることはとても重要である。

【委 員】

私は釜戸町で空き家対策を行っている。今後の進め方について、外部から見た魅力を計画に入れることはできないか。今、世の中のライフスタイルがどう変化しているか、この先 10 年でどう変化していくか、それに対して瑞浪市の魅力がどう響いていくかが重要である。例えば空き家は、私たちから見ると課題であるが、外から見ると、テレワークができる、リニアで都会との距離がとても近くなる、安い家賃で広い所に住めるというように、課題を逆転して見ることができる。これから世の中がどうなっていくか、その中で瑞浪市の自然や教育環境などをどう活かすかは戦略だと思う。そこで外部の視点をうまく活かせば、人口の増加にもつながっていくと思うが、そういったことは盛り込まれるのか。例えば、有識者の声を聞くとか、これを基にネット調査をするなど、考えられているか。

【事務局】

ワークショップは内部意見の集約という意味合いが強い。瑞浪市の計画なので、そういうところをふんだんに盛り込みたいと考えている。一方で、外部の視点も非常に大事である。この審議会も含め、様々な会議には瑞浪市民ではない方も多く入っていただき、意見をいただいている。今、シティプロモーションを推進するという方針を立てている。その辺りも第 7 次瑞浪市総合計画に盛り込み、外からの視点の方も巻き込みながら瑞浪をどのようにしていけばいいか、総合計画に落とし込んでいきたい。委員がおっしゃる、具体的に外部向けに何かを行うことまでは考えていないが、2018 年に実施した市外住民から見た瑞浪市のイメージ調査等、これまで積み上げた外部からの意見を振り返りつつ、この審議会の委員の皆様

様の意見を多く聞いて、関係部署と連携しながら進めていきたいと考えている。

【委員】

観光協会では外部からの見え方の調査として、9月にラジオで220件、10～11月にネットで約1,000件の調査を実施している。その結果を整理して、市に共有しようと考えているので、使っていただければと思う。

【事務局】

活用させていただく。

【委員】

小学校では、高齢者と子どものふれあいを取り戻そうという活動が始まっている。例えば釜戸小学校では、授業の中で専門的な技術の授業や危険物を扱う時などに、地域の高齢の方でその専門の方に授業に入ってもらい、子どもたちが困った時に手助けをしてもらっている。孫を見るときのようにすぐ手を出すことはせず、子どもが教えてくださいという発言をしてから動いてもらう形で、学校と連携して取り組まれている。また、登下校の見守りでは、地元の高齢者がいろいろな所に立って声掛けをしている。それは昔からずっと続いており、地域の方と交流ができているところもある。

空き家の話について、以前、瑞浪市の空き家バンクの手伝いをした際、瑞浪に移住してきた方にアンケートを実施した。その時に感じたのは、転入時にアンケートだけでなく、住み始めて何年後かに、実際どうなのかというアンケートを採ると良いと思った。また、空き家の情報は、皆さん、ホームページ等でとても見られている。特に田舎の物件は人気があり、瑞浪市の空き家バンクも多くの方が見ている。探せば瑞浪にはいい物件がまだまだあると思うので、SNSなどを活用して広げていただきたい。

【会長】

多世代の交流について、これは私の推測だが、かつては学校に余裕があり、地元の方に頼ることができた。ただ、その際に同じ方だけに頼っていたため、続かなかったのではないかと。

コミュニティ・スクールとは、地域と学校が手を携えて、学校は地域のため・地域は学校のためという相互作用で地域全体が学校を中心に盛り上がっていくという、組織的な取組である。それを瑞浪市全体で進めようとしているので、かつてのように多世代の交流が活発になることが期待できる。

【委員】

私は2年前に瑞浪に転入してきた。移住先を探していた際、瑞浪は空気がとても良く、住みやすいと感じたので、ここに住むことにした。一軒家に住みたかったので空き家も探したが、全くなかった。私の周りには自然農、自然栽培、オーガニック等が好きな人が多い。田

舎に住みたい人はすごく増えているので、情報発信や移住したい人とのつながりに、市として取り組んでいただくといいと思う。

今回の資料は、本当に若者の率直な意見が載っている本当にいい資料だと思うが、これをホームページに載せる予定はないのか。

【事務局】

田舎に住みたいというニーズに対する情報発信について、田舎風景の充実を発信していくことも1つと考えている。今、市民協働課が中心となり、外部向けのPRなどを積極的にやっている。第7次瑞浪市総合計画に向けて、さらに行っていければと考えている。

「フューチャーセッション in みずなみ」のワークショップの内容は、今日の審議会で承認いただければ、早速公表したいと考えている。このような取組を幅広く周知し、瑞浪市はこのように皆様と一体となって総合計画を作るとともに、まちづくりを進めていることを幅広くお知らせしたいと考えている。

【会 長】

活発なご発言、ご質問をいただき感謝申し上げます。

ワークショップ報告書については、この内容でよろしいか。

(異議なしの声)

【会 長】

それでは、この内容で公表していただくこととする。

これをもって、第4回瑞浪市総合計画審議会の議事を終了する。進行を事務局にお返しする。

【事務局】

貴重な建設的なご意見、ご提案をたくさんいただき、お礼申し上げます。第7次瑞浪市総合計画の策定に反映していきたいと考えている。

次回の審議会は12月上旬頃の開催を予定している。後日、日程調整をさせていただくのでよろしく願います。

それでは、これにて第4回瑞浪市総合計画審議会を閉会とする。

以上